

氏名	萩原淳平 <small>はぎ わら じゆん べい</small>
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第120号
学位授与の日付	昭和52年11月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	明代蒙古史研究

論文調査委員 (主査) 教授 佐藤 長 教授 島田 虔次 教授 本田 実信

論文内容の要旨

本研究は、14世紀半ばから16世紀末までの約二世紀半のモンゴルの歴史を研究したものである。当時、中国では、モンゴル族のたてた元朝が亡んだ後の明朝の時代にあたり、モンゴリアでは、タタル・オイラート二部族を中心に歴史が展開された。

これまでにも、この時代のモンゴル史を研究したものはあったが、それらはモンゴル支配層の系譜の作製や、戦争などを中心とする狭義の政治史、戦争などにてでくる地名の考証を中心とした歴史地理学的研究の域をはず、その研究方法も、定着農耕社会の歴史研究方法と殆んど変らなかつた。

しかし、モンゴル族は本来遊牧民族で、その生活様式・社会形態・精神構造など多くの点で、定着民族とは異なる。論者はこの時代のモンゴル族の歴史を、単に政治史的な面からだけでなく、時に定着農耕民との交渉を通して、両者の相違点を明らかにしつつ、できる限り政治・社会・経済・文化の各方面から総合的に研究している。また、その結果、これまでの狭義の政治史的解釈も改められている。

つぎに本研究の概要を述べる。

第1章では、元末明初のモンゴル族の情勢が取り扱われている。これまでの説によれば、元朝後継者たちは明軍に圧迫され、一旦彼らの発生地であるモンゴリアに帰って、元朝の回復をはかろうとしたが、強力な明軍のモンゴリア追撃にあつて、その望みをたたれたとされている。

しかし、実はモンゴリアに帰った元朝後継者たちは、明軍の追撃に敗れたというよりは、百年の中国支配の間に、遊牧民族本来の性格の多くを失い、もはや純粹の遊牧生活に復帰できず、また特に中国の農耕社会に対する経済的依存関係をたち切られて、元朝回復の意欲を失って、自己崩壊的に明軍に降つた。そののち、彼らは永楽帝のおこした「靖難の変」を契機に明朝に貢献し、降服者の立場から社会的地位を回復していったことを述べている。

第2章では、明代中期の第6代皇帝英宗がオイラートのエセン軍討伐に親征し、かえって土木堡で敗れ、捕虜になった大事件、所謂「土木の変」を通して遊牧民族の性格を検討する。先ず「土木の変」の

原因は、オイラートの明朝に対する経済的要求が、朝貢貿易、回回人を中心とする隊商貿易、兵器類などの密貿易であり、それらが年ごとに急激に増大したのに対し、明朝が貿易制限を行ったり、密貿易禁止を厳重にしたため、エセンが侵入をはかったことによる。言うまでもなく、エセンは明朝を倒そうとして侵入したのではなく、まして中国を征服して征服王朝樹立をはかろうとしたものでもない。むしろ逆に明朝あってのオイラート王国であった。その事は、エセンが一年後に、殆んど条件もつけずに英宗を送還したし、それとともに事変前の貿易状態を、半ば威圧的に、半ば懇請的に継続することを要求したことによっても知られる。

これらの事情からも明らかなように、エセンの侵入の目的は、明朝と有利な貿易を継続し、富国強兵をはかり、ひいては、まだチンギス・カーンの子孫として隠然たる勢力をもつタタル部を倒し、モンゴリアを統一して名実ともに大遊牧王国を建設することにあつた。事実、それに成功して、彼が築いた王国は短期間ではあつたが、チンギス・カーン以来最大の規模であつた。そして、この王国は政治・軍事面を主宰するエセンを中心としたオイラート部族と、外交・経済面を担当した皮兒麻黒馬に象徴される回回人集団とによって樹立され、支えられた。しかも両者の関係は、オイラートが政治的主導権をもって優位に立ってはいたが、封建的な君臣主従の関係というよりは、職務分担的役割を持つ対等に近い関係で、共生 Symbiosis の立場にあつた。なお、この遊牧王国の成立の根拠でもあり、重要な成果でもあつた東西貿易は、あたかも東の明朝、西のティムール朝などの活況と繁栄を背景としたもので、遊牧王国の一つの典型とみることができよう。

第3章では、エセン王国崩壊後、15世紀末から16世紀はじめにかけて、モンゴリアを再統一したタタル部のダヤン・カーンについて考究される。ダヤン・カーンは諸子を分封して所謂内蒙古諸部落の基礎を築いた英雄として知られ、太祖チンギス・カーン、世祖クビライ・カーンにつぐ重要人物とさえ言われ、モンゴル王国の再建者、中興の祖とも評される人物である。にも拘らず、その生没年次や業績など不明な点が多く、これまで内外の学者の論争の対象となつていた。

論者は、従来の説話的な蒙文資料をもとに、部分的に漢文資料で修正する研究方法とは異なつて、断片的ではあるが同時代的資料で、資料的価値の高い『明実録』を中心に、まず徹底的に漢文資料だけで、ダヤン・カーンの生涯と業績を再編成した。ついで、17世紀に編纂された蒙文資料とそれを対比した。その結果、蒙文資料は説話的で、単に誤謬とか過失をおかしているばかりでなく、政治的にゆがめられた点があることを明らかにし、ダヤン・カーンの生没年次や業績を確定し、あわせて、彼をめぐる有力者との関係を明らかにした。なお、ダヤン・カーンの系譜については、資料によって異説があるが、その解明を通して、当時のモンゴル社会の実情を明らかにした。

第4章では、アルタン・カーンと板升を中心に研究が進められる。板升は、はじめモンゴリアに漢人によって作られた城廓都市で、遊牧民族が自己の支配地に、漢人5万の定着農耕社会の成立を許した特異な現象である。これは、その根源をたずねると、明朝の北方防衛の最大の拠点である大同の軍隊内部の反乱に起因する。嘉靖年代3回にわたる反乱および未遂事件は、非常に複雑な事情にあつたので、反乱軍は行き場に窮して、逆に彼らがもっとも恐れていたモンゴリアに逃れ、あらゆる手段を尽してタタル部にとり入り、長い期間を費して城廓都市建設に成功し、農耕社会を築いた。

この間、アルタンはこの城廓都市に接近し、農耕社会をよく理解すると共に、他方愛孫の把漢那吉の明朝投降を機に、明朝と和議を結び、朝貢馬市の開設をはかった。これがため、アルタンは明朝の要求によって反乱主謀者ないしその後継者を明朝に引き渡すことになった。そして漢人最高指導者を失った板升を、アルタン一族が、これまでの経験から直接支配するようになり、彼は明朝から順義王に封ぜられると共に、その居所の大板升には「帰化城」の城名を賜い、豊かな牧農複合王国を形成することとなった。これはエセンの遊牧王国とまさに対照的な遊牧民族の国家形成の一形態である。

以上が、本論各章の要旨であるが、各章を通じて、14世紀半ばから16世紀末までのモンゴル史上の重要事件、重要人物が取出され、詳細な説明が行われている。

因に、論者が本研究において、もっとも多く利用した資料は、論者がかつて編纂を担当した本学部発行になる『明代満蒙史料』蒙古篇10冊である。

論文審査の結果の要旨

一般に明代の蒙古史（14世紀中期—16世紀末期）を研究する際の基本的文献は、中国側のものとしては明実録（以下実録）、蒙古側のものとしてはエルデニイントブチ *Erdeni yin tobci*（蒙古源流、以下源流）が挙げられる。従来の研究はこの両書をほぼ同等の価値ある史料と見なし、併せ考えることによって当代の歴史事実を再構成してきた。しかし論者萩原氏は、源流を物語の文献、実録を歴史の文献とし、先ず徹底的に実録によつて事実構成をし、それを以て源流を批判するという方針をとり、それに遊牧民の性格を考慮することによって、問題を再検討すべきものとした。この方針は正しいものであり、その故に論者の研究は、従来のものとは異った新しい成果を数多く生み出したのである。

論者は先ず第1章において、明初に北方ステップに帰った元朝の後継者たちは百年の間に遊牧民としての性格を失い、その生活に適應できず、一方農耕社会との聯関を絶ち切られて自己崩壊的に明軍に降っていった、而して靖難の変では、成祖（1402—1424年在位）の側について功績を立て、降服者的立場から社会的地位を向上させていった、それは決して従來說かれるごとく、蒙古人はあくまで元朝の再興を目指して屈しなかったというものではなかったという。ここでは実録その他の史料が精密に検討されており、傾聴すべき内容をもつが、元朝の後継者たち、或は土着の蒙古人たちがすべて明に降服したかどうかは問題が残り、在來說が完全に否定され得るかどうかは尚一層の検討が必要であろう。

第2章以下では明代蒙古史上の代表的人物を取り上げ、その事績・背景などが詳細に追求される。第2章は、土木の変の主役たるエセン *Esen* を中心とし、そのオイラート王国の活動を述べるが、明の貿易制限や、エセンの、捕虜となった英宗（1436—49年在位、1457—64年重祚）への態度、明の朝廷との外交交渉などから、彼が明を併呑するなどの意図は全くなく、寧ろ明と西方との貿易の隆盛に赴くことを望み、その中継貿易によつて利益を得、王国を拡大推持せんとしていたことを推定する。又エセンのもとから回回人の隊商が非常に多く明側に到着していたことを傍証とするが、いずれも実録その他の漢文文献の精密な検討に基づくもので、土木の変の背景を遊牧社会の特質などを考慮して明らかにした好論といってよい。

第3章は、明代蒙古史上最大の難問とされるダヤンカーン *Dayan qaghan*（1488—1519年頃在位）

に関するものである。ダヤンカーンは蒙古文献では、四大事業を完遂し、蒙古を再統一した一世の英雄とされるが、実録ではその名は全く出ず、その頃のカーンとしては把禿猛可 *Batu möngke*・把顔猛可 *Bayan möngke* の両人が存在し、その活動も特に華々しくは書かれていない。従ってダヤンカーンと称されるのは、把禿・把顔いずれのカーンかという問題、その在位年代、その事業など、従来も研究者の間に異見が多く出され、一致を見ることの少ない問題であった。論者はこの場合も先ず実録によって把禿・把顔両カーンの在位年代を細密に検討決定し、それによってダヤンカーンを把顔猛可とし、その事業も右翼の制圧だけとする。而してその確定事実を以て源流に記載された伝承を分析し、彼を統る人物、特に夫人マンドカイカトン *Mandukai qatun* の重要性を指摘し、併せて後代蒙古の王侯が殆んど彼の子孫であることから、彼が大先祖として特に伝承化され、事績が拡大化されたとする。本章は方法・成果ともに優れ、従来のダヤンカーン研究のうちの白眉と見なされる。

第4章は、明代蒙古史の最後を飾るアルタンカーン(1507—82年)の王国の研究である。アルタンカーンの王国は、本来は遊牧国家でありながら、中に漢人5万人の定着農耕社会(いわゆる板升)を含んだ、いわば牧農王国とでも称すべきものであるが、論者はその起源を、大同の明側軍隊の反乱に求め、このときの反乱者が蒙古側に逃れ、板升を作り、農耕地帯を拓げてゆく、それをアルタンが巧みに包摂して根拠地となし(帰化城の成立)、明側から順義王の封爵を受け、牧農王国を完成したとする。この板升の起源・発展の過程は、論者によって初めて詳細に明らかにされたものである。

思うに、論者は往年長期にわたり、実録から抜粋せる蒙古関係史料の編纂出版に従事し、実録の内容には精通しており、その故に本論文はそれらの史料の十分な吟味により、従来の説を正し、或は新たに解明された点が少なくない。明代蒙古史の研究が本論文によって一段の進展を見たことは疑いのないところである。ただ第1章において、元朝の後継者の明への服属に重点を置き過ぎた記述は、その後の蒙古族の活動との聯関を些か理解しにくいものにしており、又第4章で、折角アルタンカーンのラマ教への接触を述べながら、この蒙古文化史上の重要問題を殆んど取り上げなかった点などは、今後考慮されて然るべきところであろう。しかし本論文は、明代蒙古史上、従来必ずしも明確でなかった重要問題を正面から取り上げ、精密着実な方法でこれらに一段と的確な解答を与えたものであり、将来この方面の研究の優れた指針となるであろうことは疑いない。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。